

つゆ

通釈 こんなに山全体すっかり紅葉したことよ。白露の役目はもう十分果たしたのに、どうして声を限りに鳴く虫の音を真似て、この野辺にたくさん置くのだろう。

語釈 ○もどく まねる、非難する。ここでは、虫が声をあげて鳴くに対して、涙として露がおくこと。○のべ 底本では「ゆへ」五一〇・一二本による。

参考 古今集巻第五 二五七

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらむ

白露が木々の葉を紅葉させるといふ認識による。

15にほどりがやどりせるあまはかもなくらうたくぬれてぬめるこよひか

通釈 鳩鳥がやどっているあまはどこか、目印もなくよくわからぬいが、今宵はどこかで濡れながら、いじらしいようすで寝ていることだろうなあ。

語釈 ○にほどり 鳩鳥。かいつぶり。潜水の得意な水鳥。湖沼、湿地、堀、池、河川などに生活する。岸辺のヨシの間に隠れ、水面にマコモ・ヨシなどの葉茎や藻の茎などを利用して浮き巣をつくる。○あま 鳩鳥がやどる所だが、「あま」の語未詳。

○はか 目当て、目標、目印。

注① 『回文類聚』所収「擬織錦図」は一例。

注② 「あめつちのうた」は、平安初期の清音四十八を重複しないように用いて作られた「あめつちの詞」を詠み込んでいる。

(平成六年十二月十日受理)

産に手折って帰るような人もこないで、我が家でゆつたりと過ごしなさいと言った。

参考 古今集巻第一 五五

そせい法師

見てのみや人にかたらむ桜花手ごとに折りて家づとにせむ

11くさまくらつゆさへむすぶ袂なりかれつゝのちのゆめのかよひぢ

通釈

旅寝をすると、涙に露さへ加わって私の袖はぐつしよりと濡れているよ。あの人と逢えなくなったので、せめて夢の中で通おうとしてなお行き着くことができない道すがらのことなんだけれど。

語釈

○くさまくら 草を枕として旅寝すること。○つゆさへすでに涙がたもとを濡らしているうえに。○かれ ラ行下二段活用動詞「かる」の連用形。「枯れ」と「離れ」の掛詞。「離る」は疎くなる、離れる。○つゝ、…にかかわらず、…ながら。○くさまくら・つゆ・むすぶ・かれは縁語。○ゆめのかよひぢ 夢の中で恋人の元へ通う道。

参考 古今集巻第十二 五五九

藤原敏行

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人目よくらむ

12へにかよふるいのきしよりひくつなでとまりはこゝとつげよなにはえ

通釈 岸壁から引いた綱が、しっかりと船の舳先につながったよ。

さあ、今日の泊まりはこの難波の港と告げるがよい。

語釈

○へ 船の舳先。艫の対。○るい 類・累・罌などが考えられるが、ここは「とりで」の意の「罌」とし、港の岸壁と解釈した。「壘 軍壁也」(説文)。○つなで 綱手。船に繋いで引く綱。「牽(豆奈天) へ( ) 内割注」挽船繩也」(和名抄)。○なにはえ 難波江。大阪付近の海を指す。

13まつもおひのやまもときはあきくれどははそのもみぢてるとやはきく

通釈

松も生長し野山も秋を迎えたけれど、柞の紅葉が美しく照り輝いていると聞いただろうか、まだ聞かないよ。

語釈

○まつもおひ 松は長寿の象徴であり「老い」とともに用いられることが多い。しかし、この場合「秋くれど」といい、一年の移り変わりに関する表現と見るほうがよい。したがって、正月子の日に根引きされるような小松が生長したととる。○ははそ 柞。「檜(波波曾乃木 又奈良乃木) へ( ) 内割注」(新撰字鏡)。「柞(波波曾) へ( ) 内割注」(和名抄)。ブナ科の落葉高木の総称。とくに小檜の別称という。紅葉が美しい。

参考 古今集巻第五 二六六

秋霧は今朝はな立ちそ佐保山のははそのもみぢよそにても

見む

古今集巻第五 二六七

坂上是則

14やまもかくみなもみぢけりなどかのべむしのなくねをもどくしらは

佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

通釈 私がずっと片思いに苦しんでいるのを、あなたはご存じでしょうか。片糸を無理に繕ろうとすれば切れてしまうように、あなたのお側に寄りたい、あなたに逢いたいと思いつながら、かなわぬ恋のために命が絶えてしまうのでしょうか。

語釈 ○かたいと 片糸。繕っていない糸。繕った糸に比べ、もう

く切れやすい。恋する人に寄ることができない状態を表す。○へつゝ、ハ行下二段活用動詞「経」連用形＋接続助詞「つつ」。「経る」のに並行して次の「わぶ」という事態が存在することを表す。○わぶる バ行上二段活用動詞「わぶ」連体形。○ひと恋しく思う相手。○よらむ ラ行四段動詞「よる」未然形＋意志の助動詞「む」。「よる」は「繕る」と「寄る」との掛詞。○たえなむ ヤ行下二段活用動詞「絶ゆ」連用形＋強意の助動詞「ぬ」未然形＋推量の助動詞「む」連体形。係結び。片糸を繕ろうとして切れてしまう状態に、恋人に近付きたいと思いつながら願いがかなわず、命が絶えてしまいそうな我が身をたとえた。

8 むぐらふのまなきあらのとやどはあれてわがせはみえずまでどひさしく

通釈 まるで葎草がすきまなく生えた荒野のように、我が家はすっかり荒れ、あの人は姿も見せてくれない、ずっと待っているのに。

語釈 ○むぐらふ 葎生。むぐらの生えた荒れた所。葎草は、野原や道端によく見られるつる性の一年草。葉および葉柄には小さ

な刺がある。○まなき 間なき。○せ 夫。

9 のこりなくやそしまもみむおきつなみはなれむそらのくものあげ  
ぼの

通釈 さあ、点在する多くの島々の姿もあますところなく見よう。

沖の波とようやく見分けがつくようになってゆく空に、茜色の雲がたなびく曙だよ。

語釈 ○やそしま 八十島。数多くの島。○おきつなみ 沖に立つ波。「つ」は連体助詞。○はなれむ ラ行下二段活用動詞「離る」未然形＋推量の助動詞「む」連体形。海か空か区別がつかない状態であったところに曙の光が射し、波と雲とが区別できるようになるようす。

10 のどのどとにほへわがやどさくらばなをりからすひとこぬやまざとに

通釈 のんびりと我が家に咲き誇っていらつしやい、桜花よ。ここは、せっかくの花を手折って枯らしたりするような人は来ない山里だからね。

語釈 ○のどのどと のどかなさま、のんびりと。「のどのどと」かすみわたりたるに」(更級日記 初瀬) ○にほへ ハ行四段活用動詞「匂ふ」命令形。「匂ふ」は、美しく輝く、照り輝く意。○をりからす 折り枯らす。手折って枯らす。この山里には土

糸。

4 いづこなるくさのゆかりぞをみなへしこゝろををけるつゆやしる  
どち

通釈 紫草なら武蔵野なんだが、この女郎花はいつたいどこの草の  
ゆかりなんだろう。私にはわからないけれど、この花には心を  
こめて宿っている露がきつと親しい仲間なのだろうなあ。

語釈 ○くさのゆかり 古今集八六七「紫のひともとゆるゑに武蔵野  
の草はみながらあはれとぞ見る」。一本の紫草の縁で、武蔵野  
に生えている草すべてがいとしく思われるの意。古今六帖一一  
五七「武蔵野の草のゆかりときくからに同じ野べともむつまじ  
きかな」○こころをおける 「おける」はカ行四段活用動詞  
「置く」命令形+存続の助動詞「り」連体形。「置く」の主語は、  
「心」と「露」の双方である。「心置く」は心を留める、執着す  
るの意。○どち 親しい人、仲間。

参考 女郎花はしばしば美しい女性にたとえられる。ここでも女性  
を連想しながら、紫草ならぬ女郎花に心を惹かれたという歌に  
まとめたのである。

5 ちりもなきかがみのやまにいとゞしくよそにてみれどあかきもみ  
ちば

通釈 ほんの少しのくもりもない鏡という名をもつこの鏡山だから、

遠く離れたところから見るのだけれど、一段と明るく赤く照り  
輝く紅葉だなあ。

語釈 ○かがみのやま 鏡山。滋賀県蒲生郡竜王町と野洲郡野洲町  
にまたがる山。○いとゞしく 形容詞「いとどし」連用形。い  
よいよはなはだしく、いっそうひどく。○よそ 離れた所、関  
係のない所。○あかき 形容詞「明し」・「赤し」の連体形。  
曇りのない鏡だから「明るい」意と、紅葉が「赤い」の意とを  
掛ける。

6 はなかとてゆきのまにまにをりくれどかつきえかへりてにもたま  
らず

通釈 花かしらとあって、道すがら雪の降るままに折ってきたのだ  
けれど、折るはしから消えて手にも残らないよ。

語釈 ○ゆき 「雪」と「行き」の掛詞。○まにまに 「間に間に」  
と「随に」の掛詞。雪の降る中を歩みながらの意。○きえかへ  
り ラ行四段動詞「消え返る」連用形。「消ゆ」を強めた言い  
方。「かへる」は、すっかりくするの意。○たまらず ラ行四  
段活用動詞「溜まる」未然形+打消の助動詞「ず」終止形。あ  
とかたもなく消えてしまう。

7 かたいとにへつゝわぶるはしるやひとよらむと思ひてかつやたえ  
なむ

通釈 双六盤の歌。これも、有忠が詠み始めたものに、後から続けて詠んだもの

語釈 ○ありたゞ 藤原有忠。右大臣恒佐の男。従四位上左馬頭。母、藤原清貫の女。『尊卑分脈』に「歌人」とある。「あめつちのうた」に続く、有忠の発案による歌群制作である。

1するがなるふじのけぶりもはるたてばかすみとのみぞみえてたなびく

通釈 駿河にある富士山の煙は年中立ちのぼっているのだが、立春ともなると季節を映して、霞そのもののように空にたなびいているよ。

語釈 ○するが 駿河。現在の静岡県の一部。○はるたてば 立春をむかえると。

2くさしげみひともかよはぬ山ざとにたがうちはらひつくるなはしろ

通釈 草が生い茂って訪れる人もいない山里なのに、いったい誰がその草を払ってつくった苗代なのだろう。

語釈 ○しげみ 「しげ」は形容詞「繁し」の語幹。「み」は原因や理由を表す接尾語。ここは、草が茂っているから人が訪れないの意ではなく、草が茂っているところから人が訪れていないことがわかるの意であろう。○なはしろ 靛をまいて苗を仕立

てる田。

参考 万葉集巻第四相聞 七七九

ことではたがことにあるかをやまだのなはしろみづのな  
かよどにして

万葉集巻第十四譬喩歌 三五九八

なはしろのこなぎがはなをきぬにすりなるるまにまにあぜ  
かなしけ

古今和歌六帖第六 三八六六

なはしろのこなぎがはなをきぬにすりなるるまにこあぜか  
かなしき

3ろくろにやいとみくらむ引まゆの白玉のをにぬけどたえぬい

通釈 この糸は糸繰り車にかけて引いているのだろうか。匹繭からとった糸で美しい白玉を貫き通してみれば、貫いても貫いても終わることがないよ。

語釈 ○ろくろ 轆轤。糸繰り車。「維車、趙魏之間、謂之轆轤車」

(方言五)。和名抄には「轆轤 四聲字苑云 轆轤(鹿盧二音 俗云六路)へ(内割注)圓轉木機也」とあり、これでは工

作具で糸繰り車の説明はない。しかし、ここは「糸もひく」とあるところから、糸繰り車の意をとる。○ひきまゆ 匹繭。一

匹のさなぎの入っているまゆ。「獨繭 比岐万由(和名抄)。  
○しらたまのを 白玉を貫く緒。「を」は緒で、紐や糸の類。

○たえぬ ヤ行下二段活用動詞「絶ゆ」未然形+打消の助動詞「ず」連体形。糸がどこまでも切れなくて長く続く状態。○い

## 源順「双六盤歌」注釈

原田真理

「双六盤歌」は、双六盤の図を描いた十五首の歌を指す。「あめつちのうた」・「碁盤歌」とともに、源順によって作られた技巧歌群のひとつである。源順集中には「あめつちのうた」「双六盤歌」「碁盤歌」の順序に収められているが、これは作成の順序によると考えられる。「あめつちのうた」と「双六盤歌」の詞書をならべて示す。なお、「碁盤歌」には詞書はない。

A あめつちのうた四十八首、もとふちはらのありただあぎな藤あむ、よめるかへしなり。もとのうたは、かみのかぎりにそのもじをすゑたり。このかへしはしもにもすゑ、ときをもわかちてよめるなり

B 双六番のうた、これもありたゞがよみはじめたるによみつぐ

すなわち、「あめつちのうた」・「双六盤歌」ともに藤原有忠の着想によるものであり、「あめつちのうた」から「双六盤歌」へ展開したことがわかる。「あめつちのうた」を部立に分けた沓冠折句歌として作り直した順は、次の「双六盤歌」では「よみつ」いだと

いう。有忠が途中まで作ったものを、順が引き継いだわけである。有忠が手を付けてみたものの行き詰まった結果、順に未完成の作を示したのであろうか。和歌によって図形を描くという発想は、漢詩によって図形を描いた中国の例にならったものである。「あめつちのうた」に見られる音韻への高い関心とともに、漢文芸の影響を示している。順は源為憲や橘正通らの漢文芸の師であり、撰和歌所の召人でもある。漢詩文と和歌双方に通じた順だからこそ、有忠は「あめつちのうた」を贈ったのであろう。「双六盤歌」に続く「碁盤歌」の制作にはより複雑なものへ挑戦する順の意欲がうかがえ、新趣向の展開者・完成者としての順の存在を示している。漢詩文で培った知識を和歌に生かそうと試みる人々の中心に、順が位置していたと見るべきであろう。

通釈にあたっては順集（書陵部蔵五一・二）を底本とした。歌には1〜15の番号を付したが、新編国歌大観番号の52〜66番にあたる。なお、9・10の歌は底本にはなく、書陵部蔵五一〇・一二本より補った。

双六番のうた、これも、ありたゞがよみはじめたるによみつぐ